王寺町文化財調査報告書　第11集

西安寺跡第3次

発掘調査報告書

2016. 3

王寺町教育委員会

西安寺跡第３次

発掘調査報告書

序

このたび、王寺町文化財調査報告書第11集を刊行することとなりました。

本書に収録しているのは、昨年２月～３月に実施した西安寺跡第３次発掘調査の成果です。西安寺跡は、昭和初期から古代寺院遺跡として知られていたものの、中心部では発掘調査が行われたことがなく、詳細がよくわかっておりませんでした。

そこで、土地所有者である舟戸神社のご協力によって発掘調査してみたところ、礎石など飛鳥・奈良時代の建物跡が出土し、そこに大寺院があったことがわかりました。王寺町は、歴史的に見て大和川水運との関係が深く、川のすぐそばにある西安寺も水運との結びつきが想起されます。

今後も西安寺跡の調査を継続し、住民に親しまれる遺跡として保存・継承していきたいと考えております。

最後になりましたが、このたびの調査の実施についてご協力くださいました土地所有者様をはじめ、文化庁、奈良県教育委員会文化財保存課など、関係各所の皆様に御礼申上げます。

2016年３月

王寺町教育委員会

教育長　梅野　満雄

例　言

1．本書は、奈良県北葛城郡王寺町舟戸２丁目 4189 番地内において実施した西安寺跡第３次発掘調査について報告したものである。西安寺跡は『奈良県遺跡地図』（奈良県教育委員会、2010 年改訂版）10 B―0001 として登載されている。

2．調査は王寺町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体	王寺町教育委員会	教育長　梅野満雄（2015. 4. ～）
	教育次長　吉川亨（～ 2015. 4.）　同　乾清（2015. 4. ～）	
	生涯学習課長　谷口誠	社会教育係長　青山幾一
調査担当者	同主任　岡島永昌	同臨時職員　櫻井恵
発掘作業	有限会社　ワーク	
空撮・写真測量	株式会社　アクセス	
調査協力・助言	舟戸神社、文化庁、奈良県教育委員会事務局、奈良県立橿原考古学研究所、王寺町観光ボランティアガイドの会、荒木浩司、石橋忠治、市本芳三、江浦洋、大脇潔、高妻洋成、清水昭博、菅谷文則、鈴木嘉吉、関川尚功、田邊征夫、塚口義信、平田政彦、平林章仁、安村俊文、 山下隆次、吉岡正行、脇谷草一郎	

3．本書で使用している座標数値は世界測地系に基づくもので、水準値はＴ．Ｐ．値（東京湾平均海面値）に基づくものである。

4．土層の色、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖 23 版』に拠った。

5．図２は王寺町下水道台帳の地形図（1/500）、図３は国土地理院発行の 1/50,000 地形図大坂東南部（昭和 59 年７月 30 日発行）および『奈良県遺跡地図』（2010 年改訂版）をもとに作成した。

6．出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町教育委員会において保管している。

7．本書は、第２章３を櫻井恵が、その他を岡島永昌が執筆し、岡島が編集した。

本　文　目　次

第１章　はじめに ---------- 1

第２章　調査の内容 ---------- 5

第３章　まとめ ---------- 12

挿　図　表　目　次

図１　王寺町の位置
第１章　はじめに
図２　石田氏の伽藍想定(『飛鳥時代寺院址の研究』)
図３　調査位置図（1/1000）
図４　周辺の遺跡（1/50000）
第２章　調査の内容
図５　１トレンチ遺構平面図・土層断面図（1/50）
図６　２トレンチ平面図・土層断面図（1/50）
図７　出土遺物実測図１（1/4）
図８　出土遺物実測図２（1/4）
第３章　まとめ
図９　塔基壇復元図
表１　他の塔との比較

写　真　目　次

写真図版１
西安寺周辺航空写真（西から）
西安寺周辺航空写真（南から）
写真図版２
舟戸神社遠景（北から）
１トレンチ調査前（西から）
１トレンチ調査前（西から）
写真図版３
１トレンチ腐葉土除去状況（南東から）
１トレンチ炭層検出状況（南から）
１トレンチ炭層検出状況（南東から）
写真図版４
１トレンチ遺構検出状況（測量用合成写真）
写真図版５
１トレンチ基壇検出状況（南東から）
１トレンチ基壇検出状況（北東から）
１トレンチ礎石抜取穴検出状況（北東から）
写真図版６
１トレンチ基壇検出状況（西から）
１トレンチ焼土検出状況（南西から）
１トレンチ基壇端検出状況（南から）
１トレンチ礎石検出状況（南から）
写真図版７
１トレンチ礎石１（南西から）
１トレンチ礎石２（西から）
１トレンチ土層断面（南から）
写真図版８
２トレンチ調査前（東から）
２トレンチ調査状況（東から）
２トレンチ調査状況（西から）
写真図版９
出土遺物
写真図版 10
出土遺物

図１　王寺町の位置

第1章　はじめに

1　調査の契機と経過

先行研究　本書は、舟戸２丁目4189番の舟戸神社境内において実施した西安寺跡第３次発掘調査の報告書である。舟戸神社の境内が西安寺跡にあたることについては、保井芳太郎氏の『大和上代寺院志』（大和史学会、1932年）、石田茂作氏の『飛鳥時代寺院址の研究』（聖徳太子奉賛会、1936年）などによって昭和初期から知られていた。とくに保井氏は、西安寺跡で飛鳥時代から鎌倉時代までの軒丸・軒平瓦を多数収集し、そうした時代に西安寺が存在していたことを明らかにした。

さらに、保井・石田の両氏は西安寺の伽藍配置についても検討している。保井氏は『大和上代寺院志』において、西安寺の字名があって周囲に比べて約60～90cm高くなっている舟戸神社境内に主要建造物があったと考え、石田氏は『飛鳥時代寺院址の研究』において舟戸神社境内に西面する法隆寺式伽藍があると想定した。

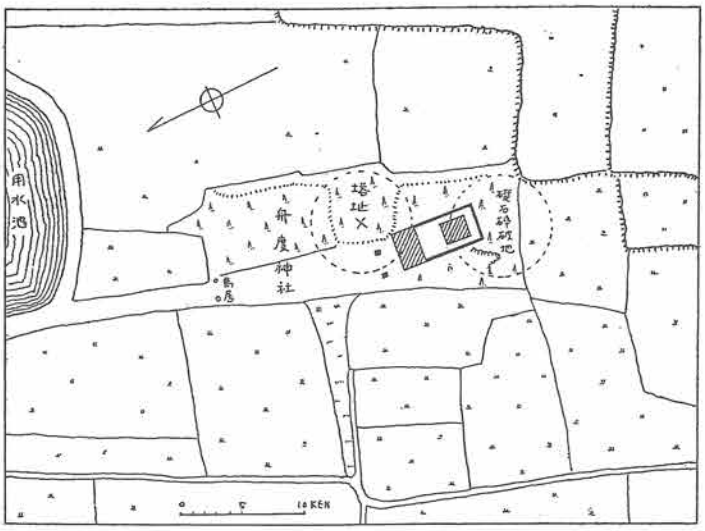


図２　石田氏の伽藍想定（『飛鳥時代寺院址の研究』）

石田氏が法隆寺式の伽藍配置を想定したのには次のような理由がある。まず、氏が塔跡と考えたのは神社拝殿の北東にある径約９ｍの不整形の隆起で、狛犬から東へ約5.4ｍのところに明治14～15年（1881～82）頃まで径1.8ｍ以上で、その中央に径約60cmあまりの円形の穴が穿たれた礎石があった。石田氏はこれを塔心礎と考えたのだろう。また、石田氏は神社本殿の南に礎石を掘り出した跡があることや、礎石を発掘破砕していたという目撃談も聞き取っていることから、そこを金堂跡と考えた。そして、地形的に南と東が高くて北と西が低く、かつ神社の西方約30ｍの田に「門脇」「馬場脇」の俗称が残っていることから、西面する法隆寺式伽藍を想定したのである。さらには神社拝殿の西北に幅約5.4ｍ、長さ約18ｍの帯状の芝地があることにも注目している。これについては何の跡であるのか述べていないが、石田氏が想定する伽藍配置からすれば回廊跡にあたるのだろうか。

一方、西安寺は文献からもその姿を追うことができる。古くは『続日本後紀』天長10年（833）条に西安寺が大和国広湍（瀬）郡にあると記され、仁安　３年（1168）、弘安４年（1281）にも関係史料がある。そして、貞和３年（1347）には西安寺が興福寺一乗院の庄園であったことがわかり、永正10年（1513）に西安寺北之坊興秀の名が見えるのが西安寺の存在を示す史料の最後である。西安寺は聖徳太子建立の46箇院に数えられる寺院でもあり、別名を久度寺といった。平林章仁氏は『新訂王寺町史』本文編（2000年）において、仁安３年（1168）の「大和国大原吉宗田地売券」に西安寺の地を大原吉宗の先祖が相伝してきたとあることから大原氏を創建者と考え、王寺町久度の久度神社に祀られる久度神が竈の煙出し部分を神格化した渡来系竈神であることから、久度一帯に渡来系氏族の大原史氏が居住していたと考えている。

既往の調査　西安寺跡で初めての発掘調査である第１次調査が行われたのは昭和59年（1984）である。奈良県立橿原考古学研究所が共同住宅の建設に伴って神社境内の西側で実施し、トレンチ西端付近で西側の道路とほぼ平行に走る幅約3.4ｍ、深さ約60cmの溝が検出された。報告者は西安寺を取り囲む築地塀の内側に沿った溝ではないかと評価している。

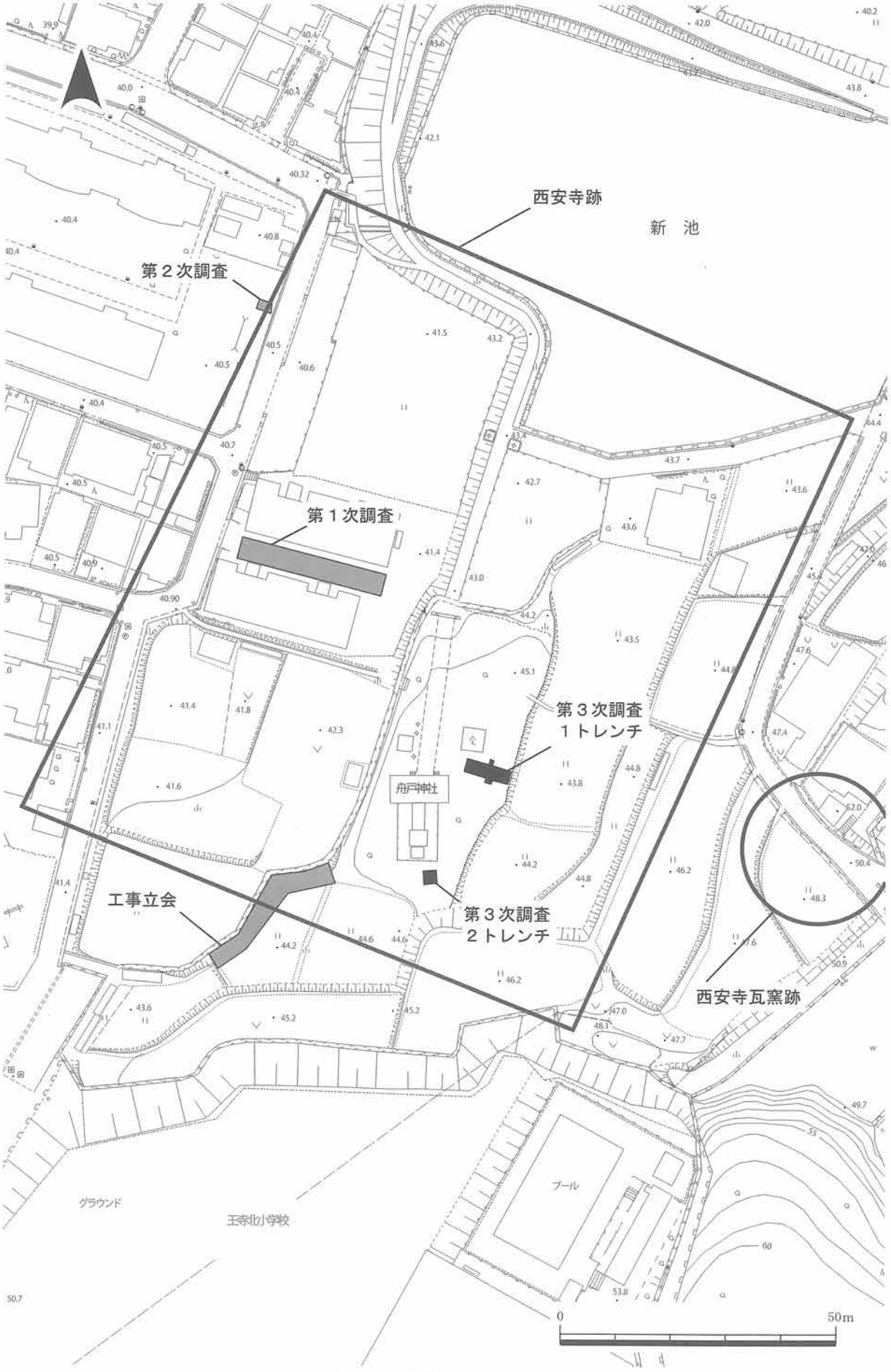


図３　調査位置図（1/1000）

次の第２次調査が行われたのは平成 26 年（2014）である。第１次調査地から道路を挟んだ北西のところで宅地造成が計画され、それに伴って王寺町教育委員会が試掘・確認調査を実施した。素掘り溝のほかは顕著な遺構・遺物が確認されず、第１次調査と第２次調査の間を走る道路が寺域を区画する可能性がある。平成 23 年（2011）には神社境内の南西側で、水田法面の擁壁工事に伴って王寺町教育委員会が工事立会を行い、軒丸・軒平を含む瓦が多く出土した。

第３次調査　以上のように、西安寺跡については考古学的な先行研究で伽藍配置が想定されていたものの、発掘調査で確認されたことはなく、伽藍の周辺部でわずかに調査が実施されてきただけであった。こうした状況から、舟戸神社境内に中心伽藍の遺構が存在するのかどうかを確認するため、国庫補助事業による遺跡範囲確認調査を第３次調査として実施することにした。

調査は舟戸神社境内に２つのトレンチ、具体的には石田氏が塔跡を想定した場所に１トレンチ、同じく石田氏が金堂跡を想定した場所に２トレンチを設定して実施した。平成 27 年（2015）２月 16 日から１トレンチ・２トレンチ同時に現場掘削を開始し、２月 27 日にラジコンヘリによる航空写真撮影、３月４日に写真測量のためのポール撮影を実施、翌５日に調査成果を報道発表して同８日に現地説明会を行った。３月 10 日で現場作業を終え、翌 11 日から埋め戻して 12 日に撤収した。

２　周辺の歴史的環境

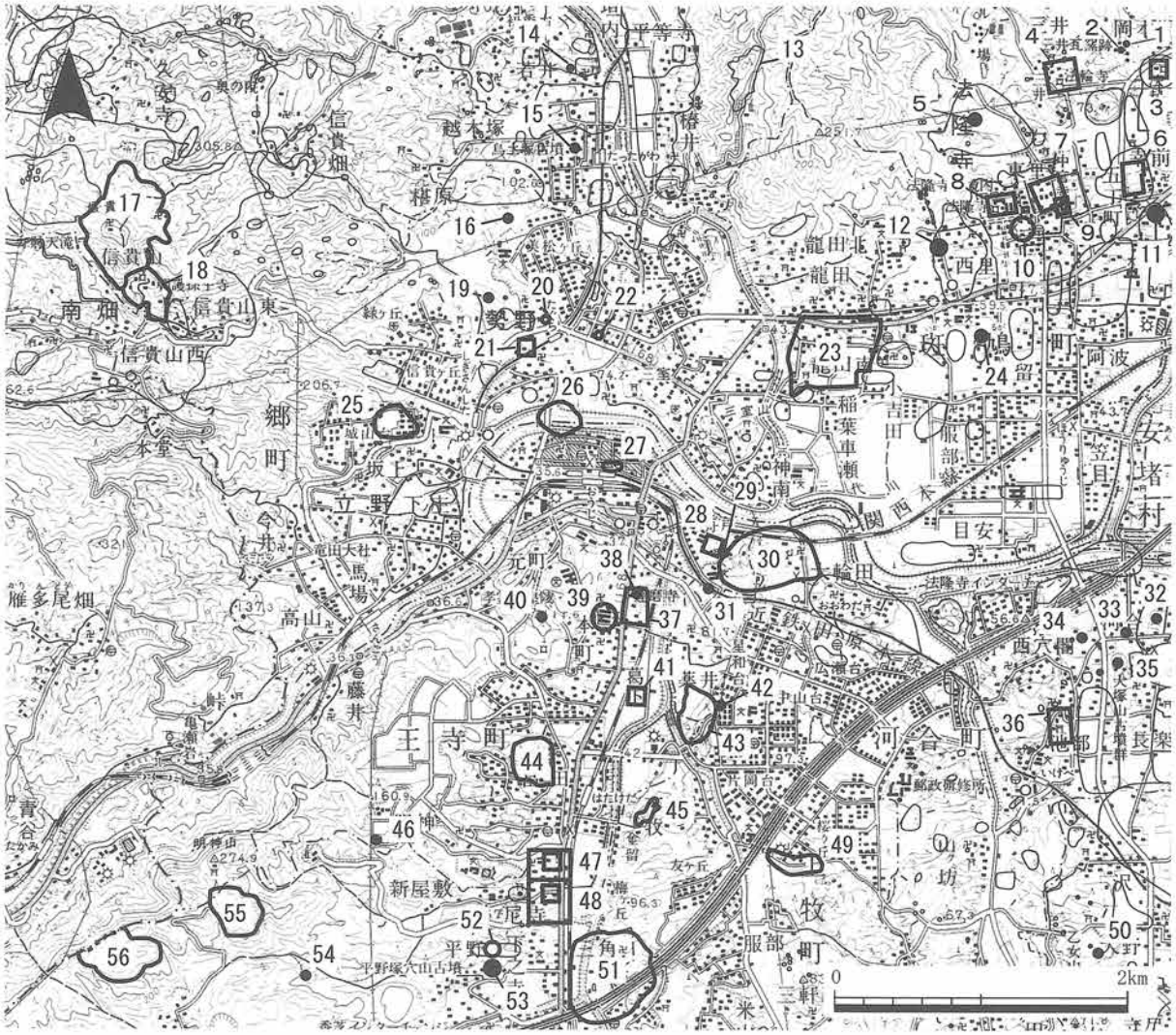
遺跡の地理的環境　西安寺跡（28）にあたる舟戸神社は舟戸地区の氏神で、天児屋根命と久那戸大神が祀られている。神社の創立は定かでないが、久那戸神とは道祖神と同じく道路や旅人などを守る神であるので、地区内を当麻街道が縦断し、その街道が大和川を渡るところに渡し船があったことと関係している。舟戸地区は、近世には王寺村の集落の一つで「船渡組」とも表記された（『新訂王寺町史』資料編 387 頁）。舟戸地区は当麻街道の渡し船とともに形成された集落といえるだろう。

西安寺跡は、舟戸神社を中心に約 120 m× 110 m四方の範囲で周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。北へ約 250 mに大和川が流れ、東へ約 200 m行けば標高約 80 mの通称・舟戸山の頂部である。西安寺跡は舟戸山からの谷筋に位置し、自然傾斜して約 35 m下った標高約 45 mのところにある。周囲の田畑に比べると神社境内だけが１～２m程度高くなっていて人工的な盛土を予感させる。西安寺跡から西へ約 260 mの地点には近世の当麻街道が走っている。

大和川と当麻道　大和川は初瀬川を源流とし、佐保川、寺川、飛鳥川、曽我川、富雄川、竜田川、葛下川など奈良盆地内を流れるすべての川水を集めて亀の瀬の峡谷を抜け出ていく。近世の宝永元年（1704）に川筋が付け替えられるまでは亀の瀬から北西に流れて大阪湾に注いでいた。こうした地勢から、近世には都市大坂と大和の村々を結ぶ流通路として、古代には難波津と飛鳥の都を結ぶ交通路として重要な役割を担った。『日本書紀』推古天皇 16 年（608）条には隋使・裴世清が難波津から海石榴市を経て飛鳥へ赴いたことが記されているが、その間は大和川が利用されたと考えられている。舟戸山にある舟戸・西岡遺跡（30）は、丘陵頂部に弥生時代後期の高地性集落があったと考えられている遺跡で、集落と大和川の交通を監視する役割との関係が指摘されている。

また、西安寺跡の西を通る街道は、近世には当麻街道や当麻道と呼ばれた。龍田（現斑鳩町）と當麻方面を結び、中近世には法隆寺から達磨寺、そして当麻寺へと巡礼に使われた道でもある。この道は、推古天皇 30 年（622）に厩戸皇子が斑鳩で亡くなった後に磯長墓まで運ばれた道とも重なり、「聖徳太子葬送の道」として信仰を集めた道でもある。この道が古代にどの位置を通っていたのかは定かでないが、沿道には聖徳太子伝説が数多く残っている。

周辺の古代寺院　奈良盆地西部の大和川沿岸には古代寺院が数多く分布している。斑鳩町の法隆寺（８～10）、法起寺（３）、法輪寺（４）、中宮寺跡（６）、王寺町の西安寺跡（28）、片岡王寺跡（39）、香芝市の尼寺北



1 瓦塚1号墳　2 三井瓦窯跡　3 法起寺境内　4 法輪寺旧境内　5 仏塚古墳　6 中宮寺跡　7 斑鳩宮跡　8 法隆寺西院伽藍
9 法隆寺東院伽藍　10 法隆寺若草伽藍跡　11 駒塚古墳　12 藤ノ木古墳　13 椿井城跡　14 西宮古墳　15 烏土塚古墳
16 今池瓦窯　17 信貴山城跡　18 信貴山朝護孫子寺　19 辻ノ垣内瓦窯跡　20 上ノ御所瓦窯　21 平隆寺跡　22 勢野茶臼山古墳
23 龍田城跡　24 斑鳩大塚古墳　25 立野城跡　26 久度遺跡　27 久度南遺跡　28 西安寺跡　29 西安寺瓦窯
30 舟戸・西岡遺跡　31 岩才池北古墳　32 城山古墳　33 丸山古墳　34 高山塚1号墳　35 川合大塚山古墳　36 長林寺跡
37 達磨寺旧境内　38 達磨寺古墳群　39 片岡王寺跡　40 馬ヶ脊城跡　41 寺院跡？　42 薬井瀧ノ北遺跡　43 香滝・薬井遺跡
44 畠田城跡　45 片岡城跡　46 畠田古墳　47 尼寺北廃寺　48 尼寺南廃寺　49 下牧瓦窯跡　50 池上古墳　51 木辻城跡
52 平野窯跡群　53 平野古墳群　54 今泉古墳　55 送迎山城跡　56 七郷山城跡

図4　周辺の遺跡（1/50000）

廃寺（47）・南廃寺（48）、三郷町の平隆寺跡（21）、河合町の長林寺跡（36）である。

これら古代寺院が創建されたのはすべて7世紀代で、法隆寺若草伽藍跡（10）が7世紀初頭、中宮寺跡・平隆寺跡・西安寺跡・片岡王寺跡が7世紀前半、法起寺・法輪寺・尼寺北廃寺・同南廃寺・長林寺跡・法隆寺西院伽藍が7世紀半ばから後半と考えられている。ただし、これらのなかで西安寺跡と片岡王寺跡は発掘調査が実施されていないので、創建年代が変わる可能性がある。

厩戸皇子が推古天皇9年（601）から斑鳩宮の造営を開始し、法隆寺若草伽藍を創建したのは、そこが大和川と竜田道による水陸交通の要衝だからともいわれる。大和川沿岸を通る竜田道沿いには平隆寺も所在し、同様に竜田神社付近で南へ分岐した当麻道のルート上に西安寺跡、片岡王寺跡、尼寺北廃寺・南廃寺が所在する。尼寺北廃寺は発掘調査によって東向きの法隆寺式伽藍配置であることが明らかになっており、当麻道を正面にして建立されたと考えられる。いずれの寺院も大和川による大和の出入り口に付近に建立されており、かつ街道とも関わりをもっていることが想像される。

第２章　調査の内容

１　１トレンチ

トレンチの設定　１トレンチは石田茂作氏が塔跡と想定した場所、具体的には塔心礎があったと見られる狛犬から東方に約5.4ｍの付近に設定した。当初は幅1.5ｍ、長さ7.5ｍで設定し、礎石を検出したのちに幅2.5ｍ、長さ8.3ｍに拡張した。また、神社境内の東端には南北方向に帯状に続く高まりがあり、１トレンチはその高まりを明らかにする意図ももって設定した。

層　序　１トレンチの層序は、帯状に続く高まりの影響を受けて西半と東半で様相が異なっていた。西半は腐葉土、褐色シルト、基壇である。基壇は地表面から38cm下がったTP+44.4ｍで検出した。西半は全体的に削平を受け、のちに簡易に整地された状況がうかがえる。

これに対して東半は腐葉土、褐色粗粒砂混じりシルト・暗褐色粗粒砂混じりシルト・炭などで構成されて瓦を多く含む盛土、炭、基壇である。これによって、トレンチの東半に幅約４ｍ、高さ約65cmにおよんで広がっていた高まりは、瓦を多く含む人為的な堆積であることが判明した。炭は厚さ12～13cm堆積し、基壇はTP+44.7ｍで検出した。トレンチ西半に炭層が堆積しない代わりに、東半の高まりの盛土に炭がブロックをなして入っている部分もあることからすると、西半を削平した土を東半へ積み上げていったと考えられる。高まりの盛土からは古代の瓦片のほかに瓦質土器が出土している。この高まりが神社境内の北側に続いていることも考え合わせると、神社の造成に伴って参道あたりが全体的に削平され、その土が境内の東端に積み上げられたのではないかと考えられる。

礎　石　原位置を保つ礎石２基を検出した。礎石１は南北の最大長さ145cm、東西の最大長さ108cmの不整な楕円状の花崗岩で、中央に径66cmの柱座と北側で幅18cm、南側で幅29cmの地覆座が造り出されていた。礎石の柱座上面はTP+44.80ｍ～44.81ｍで、ほぼ水平を保って据えられている。火を受けたために赤く変色しており、場所によってはかなり高温になったためかひび割れや剥離を起こしているところがあった。ただし、中央付近に赤く変色していない部分が円状に認められ、その大きさは径56cmである。柱が立てられていた痕跡と判断できる。同様に南側の地覆座部分にも幅18cm、長さ20cmで火を受けていない部分があり、地覆が据えられていた痕跡と見られる。

礎石２は花崗岩で南北の最大長さ144cm、東西の長さ74cm以上を測る。地表に樹木があるために全体を検出することができなかった。観察できる範囲内では明瞭な柱座・地覆座は認められなかったが、礎石の南端に地覆座を示す可能性がある部分があった。礎石の上面はTP+44.81ｍ～44.82ｍで、ほぼ水平を保って据えられている。礎石全体が火を受けて赤く変色しており、火を受けていない柱等の痕跡は確認できなかった。礎石１と礎石２の中心距離は2.15ｍで、礎石の並びは座標北に対して東に約14°振れている。

礎石抜取穴　４基の礎石抜取穴を検出した。当初、幅1.5ｍでトレンチを設定し、掘削していたときは攪乱と認識して遺構埋土を掘り上げていた。しかし、礎石を検出したのちにトレンチを拡張したところ、同じ攪乱であってもそれが礎石の抜取穴であることが判明した。そのため、トレンチ拡張前の部分は抜取穴を完掘し、拡張後の部分は検出にとどめている。したがって、以下に示す抜取穴の大きさは完掘・検出が混在したものである。

礎石抜取穴１は隅丸方形状で径135cm以上ある。トレンチ拡張前の部分では抜取穴を完掘しているので、礎石据付穴を検出している状態にあると見られる。

礎石抜取穴２は隅丸方形で南北長さ52cm以上、東西長さ80cm以上ある。抜取穴は完掘しているので、この平面形は礎石据付穴のものと見られる。トレンチ北壁の土層断面を観察すると、抜取時の掘方が礎石抜取穴３と連続していることがわかる。そのため、礎石抜取穴３の形状・大きさは不明である。抜取穴３の底からは、拳大または人頭大の花崗岩５個を検出しており、根石のようにも見えるがいずれも火を受けているので、礎石を抜き

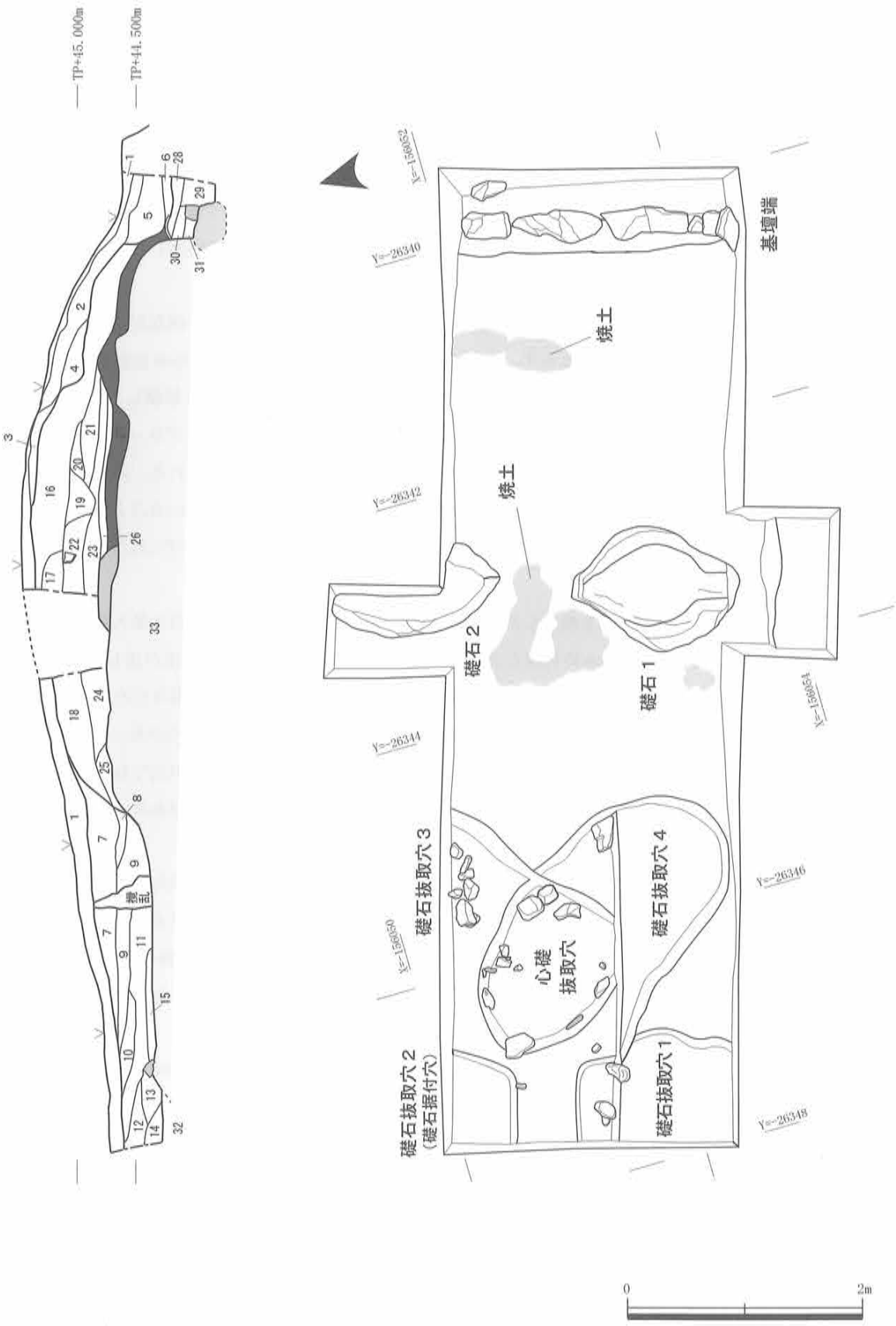


図5　1トレンチ遺構平面図・土層断面図（1/50）

1	5YR3/3	暗赤褐色	シルト　腐葉土	
2	5YR4/3	にぶい赤褐色	微粒砂混じりシルト	
3	10YR5/3	にぶい黄褐色	微粒砂混じりシルト	
4	7.5YR3/3	暗褐色	シルト	
5	7.5YR4/4	褐色	微粒砂混じりシルト	礎石抜取穴
6	7.5YR3/2	黒褐色	微粒砂混じりシルト	
7	10YR4/3	にぶい黄褐色	微粒砂混じりシルト	
8	10YR4/5	褐色	微粒砂混じりシルト	
9	10YR5/4	にぶい黄褐色	粗粒砂混じりシルト	
10	2.5Y5/3	黄褐色	粗粒砂混じりシルト	
11	10YR4/4	褐色	細粒砂混じりシルト	
12	7.5YR3/2	黒褐色	細粒砂混じりシルト	
13	5YR4/4	にぶい赤褐色	細粒砂混じりシルト	
14	2.5Y5/3	黄褐色	細礫混じりシルト	
15	10YR4/4	褐色	シルト	盛土
16	7.5YR4/3	褐色	細粒砂～小礫混じりシルト	
17	10YR4/4	褐色	微粒砂～細粒砂混じりシルト	
18	10YR5/3	にぶい黄褐色	微粒砂～細粒砂混じりシルト	盛土
19	10YR5/6	黄褐色	微粒砂～細粒砂混じりシルト	
20	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト	
21	10YR5/4	にぶい黄橙色	微粒砂～細粒砂混じりシルト	
22	7.5YR4/3	褐色	細粒砂混じりシルト	
23	10YR4/6	褐色	微粒砂～細粒砂混じりシルト	
24	7.5YR4/4	褐色	細粒砂混じりシルト	
25	10YR5/4	にぶい黄褐色	微粒砂混じりシルト	
26	5YR3/2	暗赤褐色	細粒砂混じりシルト	
27	2.5YR2/1	赤黒色	シルト　炭	
28	2.5Y5/3	黄褐色	シルト混じり細粒砂	
29	2.5Y6/2	灰黄色	シルト混じり細粒砂	
30	7.5YR4/4	褐色	微粒砂～細粒砂混じりシルト	
31	2.5Y4/4	オリーブ褐色	微粒砂～細粒砂混じりシルト	礎石据付穴
32	2.5YR5/4	黄褐色	粘土混じりシルト	基　壇
33	2.5Y5/4	黄褐色	細粒砂混じりシルト	

取ったさいに混入したものと推定される。

礎石抜取穴４は不整な楕円状で南北長さ145cm、東西長さ216cmである。抜取穴が心礎抜取穴に向かって延びていることから、同時に抜き取られた可能性がある。

心礎抜取穴　礎石抜取穴１～４の中心点で検出した。当初は攪乱と認識したために完掘している。完掘した状態で楕円形、大きさは南北径130cm、東西径154cmである。石田氏が『飛鳥時代寺院址の研究』で報告しているように、ここに明治14～15年(1881～82）頃まで径1.8m以上で、その中央に径約60cmあまりの円形の穴が穿たれた心礎があったものと考えられる。

心礎抜取穴の掘方に沿って根石のように見える石が散らばっているが、原位置を保っていないものと判断される。心礎抜取穴と礎石抜取穴の切り合いは、攪乱として掘り上げたために不明である。保井芳太郎氏の『大和上代寺院志』には明治14年（1881）に心礎が信光橋の工事に使われたとあるので、心礎は抜き取られたと考えている。地下式の塔心礎が検出される可能性も捨て切れないが、今回の調査では断割りによる確認は行わなかった。

基　壇　トレンチの東端から西へ約80cmの地点で基壇の端にあたる落ち込みを検出した。基壇上面から64～74cm下がったところには幅70cm前後、厚さ24～30cm、高さ21～38cmの花崗岩を検出し、これらは外面を意識して並べられていた。乱石積みの基壇外装にあたるとも考えられるが、石を積み上げる状況が検出できなかったので詳細は不明である。外装を施したときのものと見られる裏込め土があり、そのなかに扁平な凝灰岩１個が混入していた。付近からは劣化した凝灰岩の小片が多く出土したので、外装に凝灰岩が使われていた可能性も指摘できる。

遺存状態が良いトレンチ東半では、基壇上面に炭が12～13cm堆積していた。炭層からは壁土や凝灰岩の小片、瓦片などが出土し、すべて被熱していた。この炭層を除去すると基壇面まで赤く焼けている状況が確認できた。とくに礎石まわりで、南北長さ110cm、東西長さ110cmの範囲にわたる焼土を検出した。この焼土は壁土と見られ、煤で黒くなっていたものの白土部分も残存していた。なかにはかなりの高温で発泡しているところもあった。ただし、壁土ではなく床土である可能性もある。

炭層からの出土遺物はいずれも小片であり、かつ被熱しているために時代的特徴が知れるようなものがなかった。壁土や瓦片に混じって瓦器片が出土しているので、火災に遭ったのは中世頃と見ることが可能である。出土する遺物量や炭層の堆積状況からすれば、建物を除却したのちに火災に遭った、または焼却行為が行われたと考えられる。

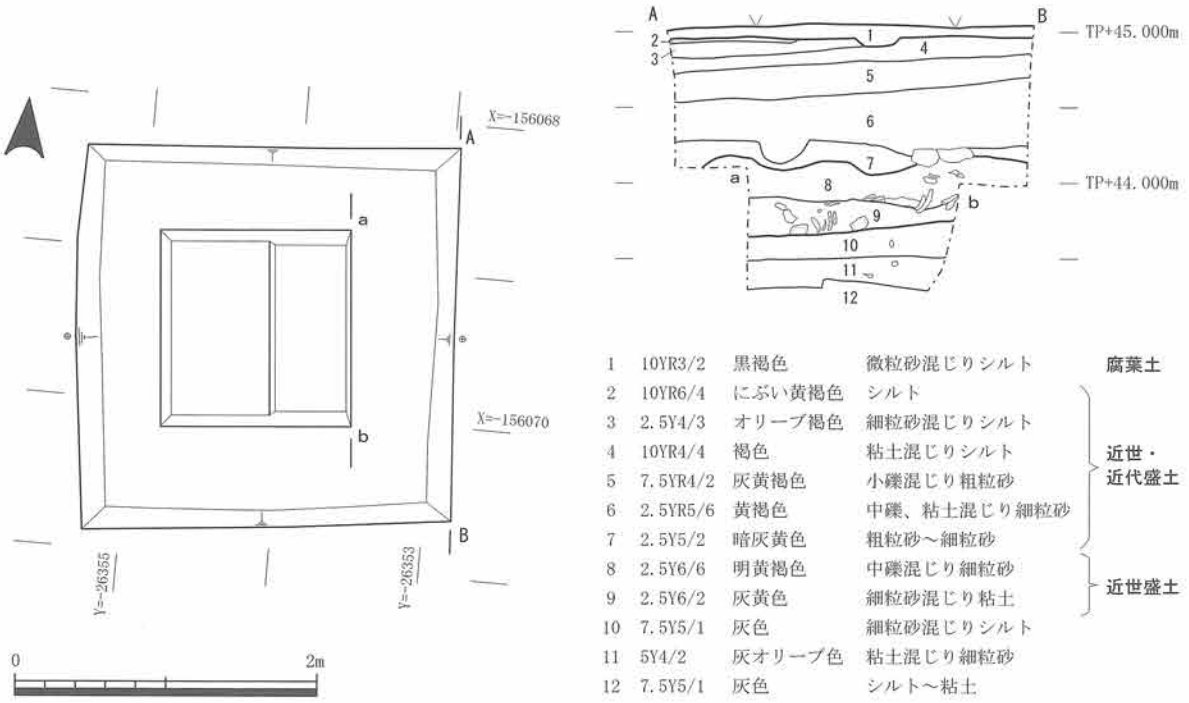


図６　２トレンチ平面図・土層断面図（1/50）

２　２トレンチ

トレンチの設定　２トレンチは石田茂作氏が金堂跡を想定した本殿の南側に、幅2.5ｍ、長さ2.5ｍの正方形で設定した。石田氏によれば、そこで礎石が発掘破砕されていたという。

層　序　２トレンチの層序は、腐葉土、近世・近代盛土、近世盛土である。最終的には地表面から1.8ｍまで掘り下げたが、地山を確認することができなかった。

近世・近代盛土　腐葉土層を除去するとトレンチの西寄りからいくつかの花崗岩が検出できた。いずれも砕き割れているように見え、石田氏が報告した証言を裏付けるような状況であった。付近から墨書のある小石が出土したが、墨書内容から現代遺物であった。

腐葉土の下は褐色系の土が堆積し、さらにその下層にはかつて腐葉土層であったと見られる暗褐色系の土があった。もと腐葉土層であったと見られる土は、褐色系の土を挟みながら３層確認した。つまり、表土の上に盛土を行い、そこに腐葉土層が形成されてさらに盛土を行う。この行為が現腐葉土層をのぞいて３度繰り返されたと推測される。これらの層からは明確に近代であると判断できる遺物は出土しておらず、近世・近代の区別がつかない桟瓦が出土している。こうした状況はトレンチ西壁で顕著に見ることができ、３層目の旧腐葉土層を除去した段階ですでに深さ1.1ｍを測っていた。

近世盛土　近世・近代盛土層の下層には、灰色系の土が基壇のような落ち込みを伴いながら堆積していた。しかし、灰色系の堆積土からも近世瓦が出土したので西安寺の基壇ではない。時期的には、むしろトレンチ北側にある舟戸神社本殿との関連がありそうである。

ここまでで地表面から1.1ｍ、TP+44.0ｍまで掘り下げたものの、いまだ瓦が多く出土する状況で、地山を確認するには深く掘ることになると予想されたため、犬走りを設けて掘り下げていった。すると、中礫が多く混じる層から瓦が多量に出土した。出土した瓦には単弁蓮華文軒丸瓦もあったが、近世の橘唐草文軒平瓦も出土しているので、これも近世の堆積である。中礫が混じる層の下層に粘土、砂が堆積しているのを確認したが、それらの層からも瓦が出土した。最終的に地表面から1.8ｍ、TP+43.3ｍ付近まで掘り下げたが地山を確認するこができず、２トレンチの掘削を中止した。

3　出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ111箱である。そのほとんどが1トレンチの腐葉土層、塔基壇上の盛土から出土した瓦である。現在整理作業中であるため、軒丸瓦・軒平瓦のなかから代表的なものを図化して報告する。そのほかに焼土、花崗岩、凝灰岩などの石材、土器類も出土している。また、塔基壇を覆う炭層に関してはできるだけ持ち帰り、洗浄して遺物の選別作業を行った。

軒丸瓦　素弁蓮華文3点、単弁蓮華文5点、巴文17点、計25点の軒丸瓦が出土している。1は素弁8弁蓮華文で瓦当径は17.7㎝（復元）、瓦当厚は3.3㎝、色調は2.5Y5/1黄灰色、焼成は軟質である。中房径3.3㎝、蓮子は1＋5、中房の周縁には段がある。弁外の点珠は認められない。『法隆寺の至宝第15巻　瓦』に掲載される軒丸瓦7Ａｂと近似している。塔基壇上の盛土からの出土である。

2～4は単弁16弁蓮華文である。2は瓦当径19.6㎝（復元）、瓦当厚2.3㎝、色調はN4/0灰色で硬質に焼成されている。外縁の形状は平坦で、瓦当の側面に笵のあたりの痕跡が認められる。中房の直径は7.2㎝、瓦当面では中房が最も前面に張り出しており、蓮子は1＋6で外側の蓮子は角形の並びとなっている。瓦当と丸瓦の接合は丸瓦の凸面に斜格子のきざみ目を入れ、粘土を盛って瓦当に繋いでいる。瓦当裏面にはよこなでが施される。2トレンチ9層からの出土である。3の瓦当径は16.3㎝（復元）、瓦当厚は2.6㎝、色調は2.5Y5/2暗灰黄色である。外縁は斜縁、中房径は5.8㎝、1＋4＋8の計13個の蓮子がある。塔基壇上の盛土からの出土で

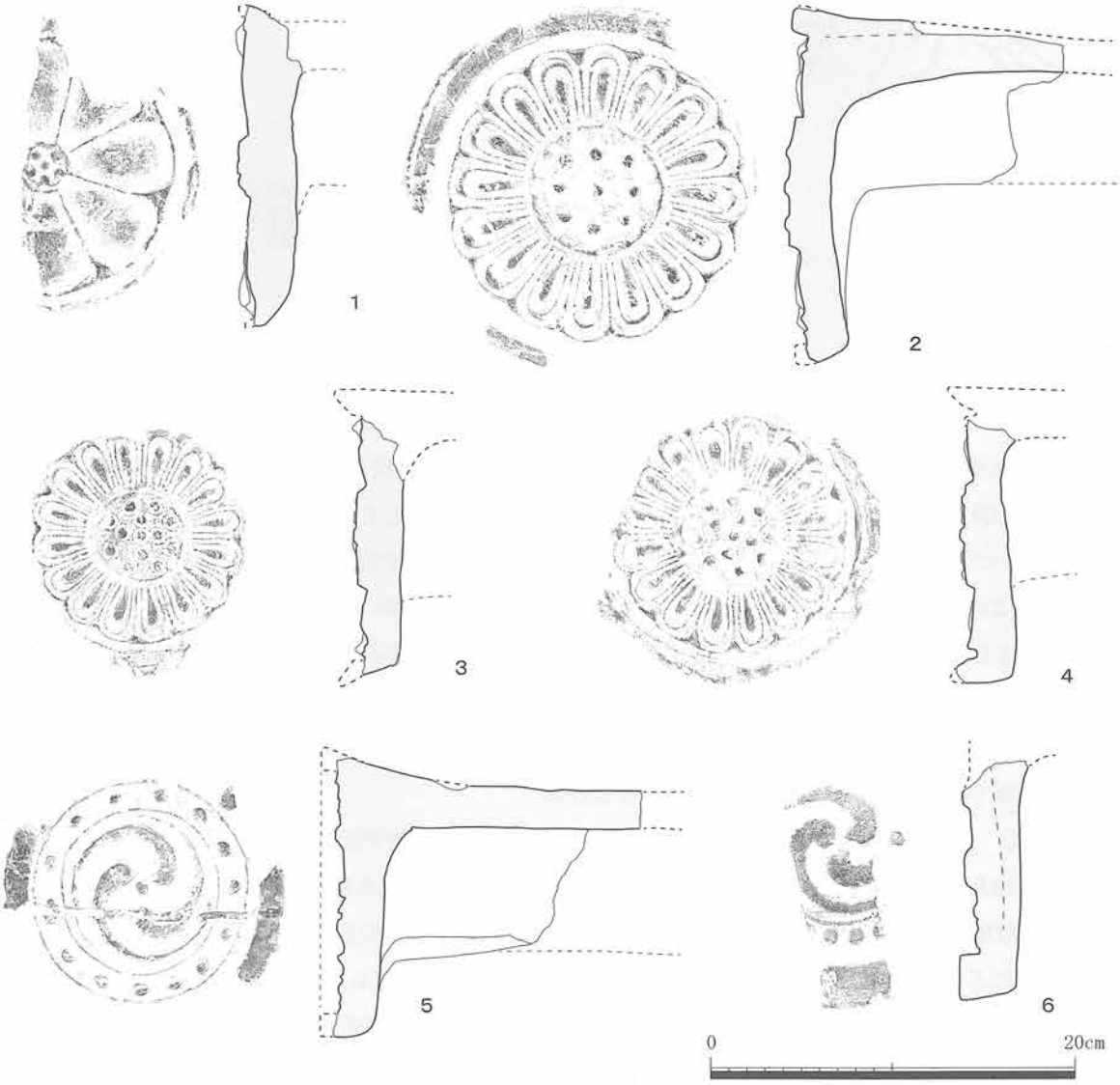


図7　出土遺物実測図1（1/4）

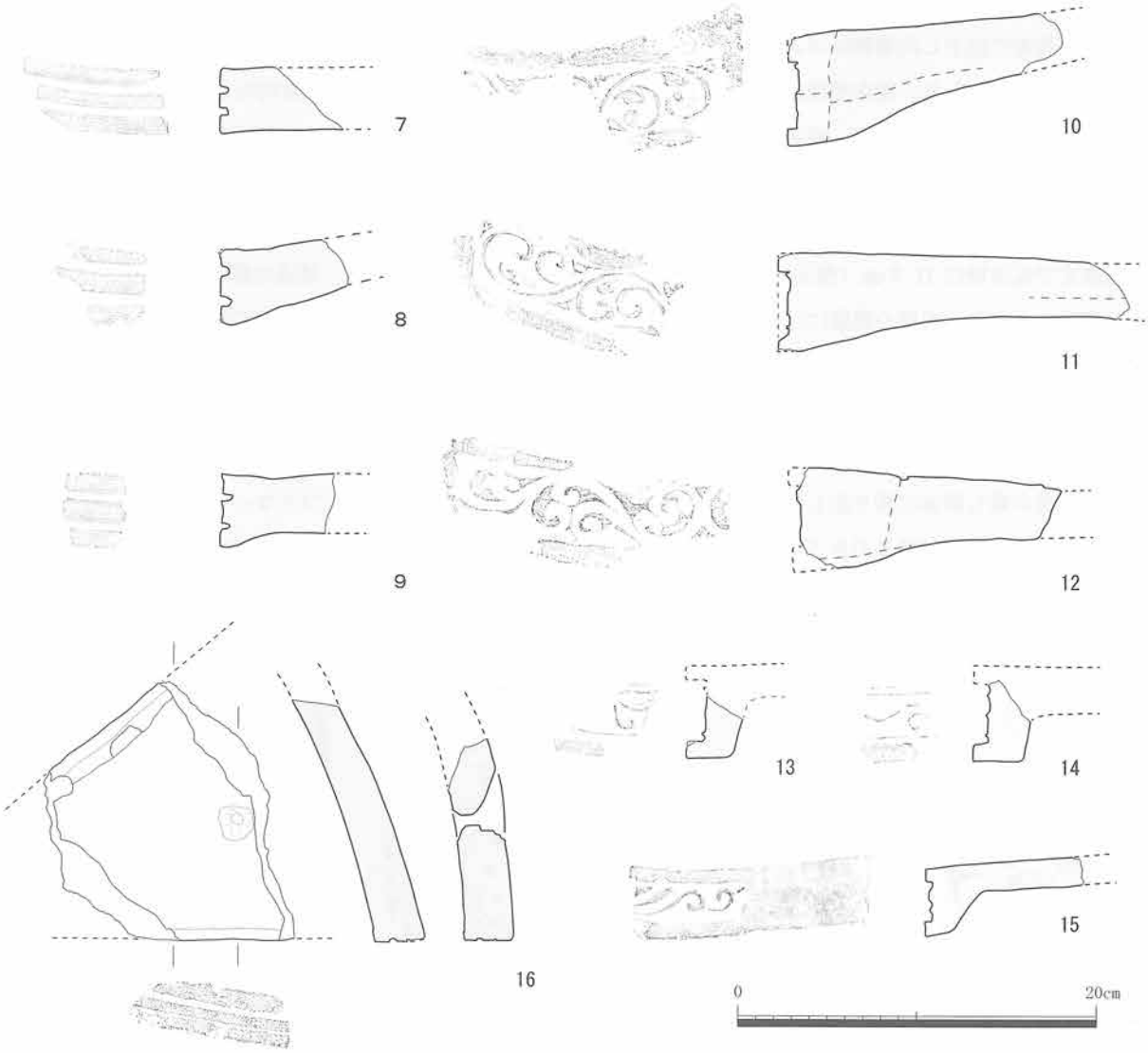


図８　出土遺物実測図２（1/4）

ある。４は瓦当径 16.0 cm（復元）、瓦当厚 2.3 cm、色調は 2.5Y6/2 暗灰黄色。外縁は斜縁、中房径は 5.8 cmで１＋４＋８の計 13 個の蓮子がある。２トレンチ８層と９～11 層から出土した破片が接合している。

５は左巻の三巴文である。瓦当径 15.7 cm（復元）、瓦当厚 2.2 cm、色調は瓦当に N5/0 灰色を認めるが、全体的に 2.5Y6/2 灰黄色を呈する。珠文帯には 14 個の珠文があり、珠文帯の内外に圏線、巴文中央に珠文をもつ。瓦笵は破損したものが使用されており、保井芳太郎氏の『大和上代寺院志』図版 61 疏瓦 14 と同笵である。本調査でも同笵と確認できる破片を他に４点確認している。２トレンチ６、７層（近世）から出土した。６も左巻の三巴文である。瓦当径 16.0 cm（復元）、瓦当厚 3.0 cm、色調は 2.5Y5/1 黄灰色である。圏線はなく、巴頭の断面形状は台形である。塔基壇上の盛土からの出土である。

軒 平 瓦　三重弧文 14 点、唐草文 32 点、不明１点、計 47 点の軒平瓦が出土している。７～９は三重弧文である。７は瓦当厚 3.6 cm、色調は 7.5Y6/1 灰色、焼成は硬質。８は瓦当厚 4.2 cm、色調は 5GY4/1 暗オリーブ灰色、焼成は堅緻である。７、８は腐葉土層および塔基壇上の盛土から出土している。９は瓦当厚 4.0 cm、色調は 10YR5/3 にぶい黄褐色、被熱のため変色している。塔の基壇外装と見られる花崗岩上の堆積土からの出土である。これらは型引きによって重弧文を施文しており、９の瓦当側の凹凸両面には施文具のあたりと思われる擦痕が認められる。今回出土した三重弧文軒平瓦には、三段の弧の幅が均等であるものと中段が太いものの２種類があった。

10、11は唐草文で、10は瓦当厚5.9㎝、瓦当面は二塊の粘土で成形されており、平瓦凸面側に粘土を追加して曲線顎が形成されている。凸面の色調は7.5YR3/1黒褐色であるが、被熱のために凹面・断面は10YR7/4にぶい橙色を呈する。瓦当面側の凹凸面にはよこなでを施す。凹面には布目痕があり、凸面側はなでによって表面を調整している。塔基壇上の盛土から出土である。11は瓦当厚5.5㎝、凹面には布目跡が残り、ハケ状の工具で粗い器面調整を行い、瓦当側は丁寧になでる。凸面は瓦当面から平瓦部に向かってなでを施している。腐葉土および塔基壇上の盛土からの出土である。10と11は中心飾りがなく、唐草文を左右に展開させており、圏線もない点は共通しているが、唐草文の先端の形状に違いがある。12は均整唐草文で瓦当厚約5.2㎝、圏線はなく、唐草文様が陰刻で表現されている。保井芳太郎氏の『大和上代寺院志』図版61華瓦4と同文様である。色調は凸面が10YR4/1褐灰色、凹面・断面は7.5YR7/6橙色を呈しており、被熱したものと思われる。腐葉土層および塔基壇上の盛土からの出土である。

13、14は中心飾りが不明であるが、唐草文軒平瓦であろう。圏線を有する。瓦当面の下部、顎の貼り付け部分のみの出土である。色調も5Y5/1、5Y6/1灰色で、塔基壇上の盛土からの出土である。15は中心飾りが橘文で左右に唐草文が展開する。脇区の幅が6.8㎝と広い。瓦当面の幅は26.5㎝に復元できる。色調は5Y5/1灰色、２トレンチ８層からの出土である。

16は隅軒平瓦である。瓦当面には２本の沈線が施文され、重弧文となっている。左側縁は焼成前に切断、端面が成形されている。瓦当面と左側縁は約40度の角度をなす。瓦当厚は2.8㎝、凹面には糸切り痕が残り、凸面はなでで器面を調整する。焼成後に両面から穿孔されている。色調は7.5YR6/6橙色。腐葉土層および塔基壇上の盛土からの出土である。

焼　土　今回出土した焼土にはスサ入り、スサが認められないもの、篩土、白土等が認められた。17、18はスサの痕跡が残るもので、17は表面が残存しており、一部レリーフ状のふくらみが認められる。色調は2.5YR5/4にぶい赤褐色、塔基壇上の盛土からの出土である。18には2.0㎝程度の礫が含まれる。色調は5YR6/6橙色、腐葉土層および塔基壇上の盛土から出土した。

19は厚さ1.3㎝の板状の焼土片である。表面は平坦で白色に塗られており、黒褐色の帯が並行して描かれているようにも見える。裏面も平坦で剥離した様に見える。色調は10YR7/6明黄褐色で、土質は砂粒の混入はなく、精製されている。壁の上塗り部分と考えられる。20は厚さ0.8㎝で湾曲して半筒の形状をした破片である。元は土製品であるようだが、火を受けて陶器のような質感に変化している。表面には、緑青を観察できる箇所もあり銅製品の溶解物の付着が考えられる。21は厚さ2.3㎝の焼土である。断面を見ると４層の重なりが認められ、１層目は厚さ３㎜、7.5YR8/1灰白色で硬質に焼成されている。２層目は厚さ２㎜、表面は5YR7/2明褐灰色で１層目と同様硬質である。３層目は厚さ５㎜、7.5YR8/6浅黄橙色の精製土。４層目は５㎜程度の砂粒を含み、スサの混入も多い。色調は7.5YR5/4にぶい褐色。側面には柱材から剥離した痕跡もあり、表面が残存する壁土で白土の塗り直しが行われた可能性も考えられる。19～21は炭層からの出土である。

石　材　花崗岩、凝灰岩、サヌカイト等が出土している。22～24は凝灰岩である。22は塔基壇上の盛土からの出土で10YR8/1灰白色。23は10YR8/4浅黄橙色、24は2.5Y8/1灰白色で混入物がほとんどない。23、24は腐葉土層および塔基壇上の盛土からの出土である。

炭層出土の遺物　洗浄選別作業を行ったところ、回収した炭層の半分は５㎜～10㎝の焼土であった。ほかに土器、瓦、塼、焼土、花崗岩、凝灰岩、金属の溶解物、鉄片等を検出した。写真図版10-25に代表的な遺物を掲載している。土器は須恵器、土師器、瓦器が出土しているが、時期が押さえられる遺物は13世紀前後の土師皿、瓦器椀では暗文が密に施される前半期のものと確認できる程度である。瓦は丸瓦・平瓦ともに小片で、唐草文軒平瓦が出土している。

第3章　まとめ

今回の第３次調査で得られた最大の成果は、西安寺の主要伽藍にかかる遺構を確認したことである。これまでは、保井・石田両氏が地形や聞き取りなどで推測していただけであったのが考古学的に確定し、かつ遺構が良好な状態で遺存していることも明らかになった。

また、今回の調査で検出した礎石２基と礎石抜取穴４基、心礎抜取穴１基は塔跡であると考えている。配置状況から礎石抜取穴４基が塔の四天柱、礎石２基が側柱にあたり、礎石１と礎石２から柱間が 2.15 m、尺に換算すればおよそ７尺となる。この距離で礎石抜取穴１～４に当てはめていくとすべて７尺でおさまる。したがって、塔身を７尺等間の 21 尺、6.45 mに推定することができる。

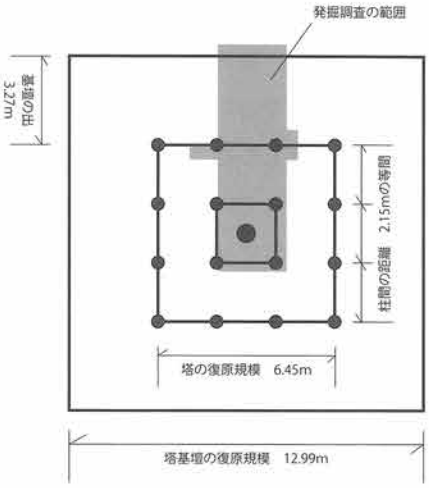


図９　塔基壇復元図

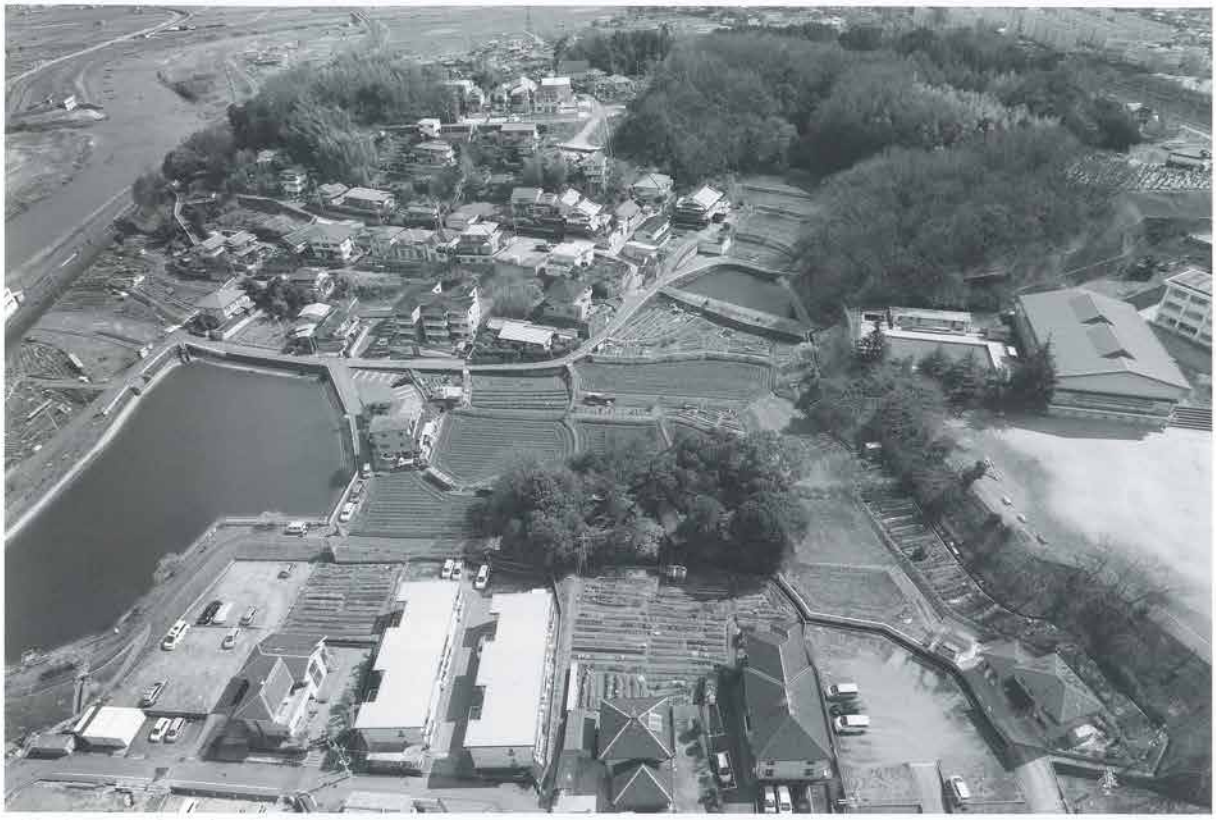
さらに、礎石１から基壇端までを計測した基壇の出は 3.27 m、尺に換算しておよそ 11 尺である。これに塔身を合わせると塔基壇を 43 尺、12.99 mに復元することができる。この大きさは現存塔で比較すると、等間とするか中央間を広くするかで違いが見られるものの法隆寺五重塔・法起寺三重塔、それに焼失前の法輪寺三重塔とほぼ変わりなく、当麻寺東塔・西塔よりも大きい。今回の調査では、基壇遺構に伴う遺物が出土していないため、考古学的に塔基壇の年代を決定することができないが、柱間を等間とすること、予想される心礎の大きさ、礎石の柱座・地覆座の造り出しなどから判断して、飛鳥時代終わり～奈良時代初め頃のものと推測される。

以上のように、塔基壇の位置・規模がほぼ確定すると、西安寺の伽藍配置も想定できるようになった。従来は石田茂作氏が西面する法隆寺式伽藍を想定していたが、２トレンチの調査成果からそこに金堂がないことは明らかである。そこで現地形を再確認してみると、塔基壇と同様の高まりが北へ続いていて、北に金堂跡があった可能性が高い。そして、石田氏が指摘していた西方に延びる芝地に注目したい。仮にこれを伽藍の中心軸にすれば塔・金堂を現地形に沿ったかたちで配置することも可能である。今回の第３次調査は中心伽藍で初めて実施した発掘調査であったにもかかわらず、塔跡の位置を確定することができた。塔基壇の遺存状況が良好だったこともあって発掘を最小限にとどめ、断ち割りは行わなかった。調査を継続して実施し、水陸交通の要衝にあった西安寺の実態解明につなげていきたい。

表１　他の塔との比較

塔　名	所在地	年　代	初重塔身規模：S（柱間寸法）	基壇規模	基壇の出：K	2K/S	軒の出：E	2E/S	備　考
西安寺	奈良県王寺町		21 尺（7　7　7）	43 尺	11 尺	1.05	不明		数値は参考
法隆寺五重塔	奈良県斑鳩町	7 世紀末	21.2 尺（6.2　8.8　6.2）	45.6 尺	12.2 尺	1.15	13.0 尺	1.23	裳階付
法起寺三重塔	奈良県斑鳩町	706 年	21.2 尺（6.2　8.8　6.2）	38.5 尺	8.6 尺	0.81	11.4 尺	1.08	
法輪寺三重塔	奈良県斑鳩町	7 世紀後期	21 尺（6.1　8.8　6.1）	44 尺（下成）	11.5 尺	1.10			焼失前
薬師寺東塔（三重塔）	奈良県奈良市	730 年	23.4 尺（7.8　7.7　7.8）	44 尺（創建時）			13.7 尺	1.17	裳階付
当麻寺東塔（三重塔）	奈良県葛城市	8 世紀後期	17.6 尺（5.3　7.0　5.3）	40.5 尺	11.5 尺	1.31	11.4 尺	1.30	
当麻寺西塔（三重塔）	奈良県葛城市	9 世紀	17.3 尺（5.3　6.6　5.3）	35.9 尺	9.3 尺	1.08	10.1 尺	1.17	

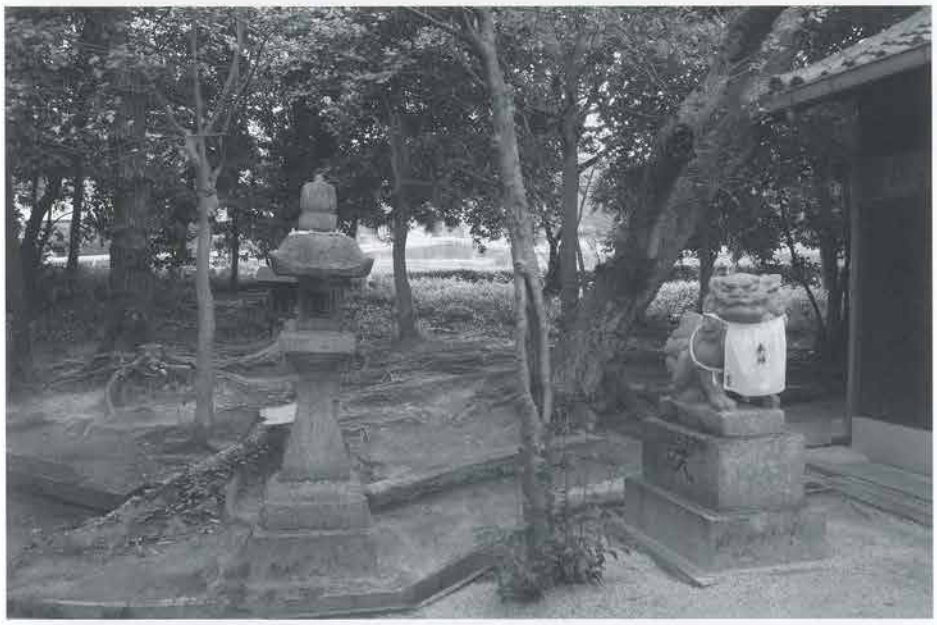
箱崎和久「古代寺院の塔遺構」（奈良文化財研究所『文化財学の新地平』吉川弘文館、2013 年）に加筆修正して作成。



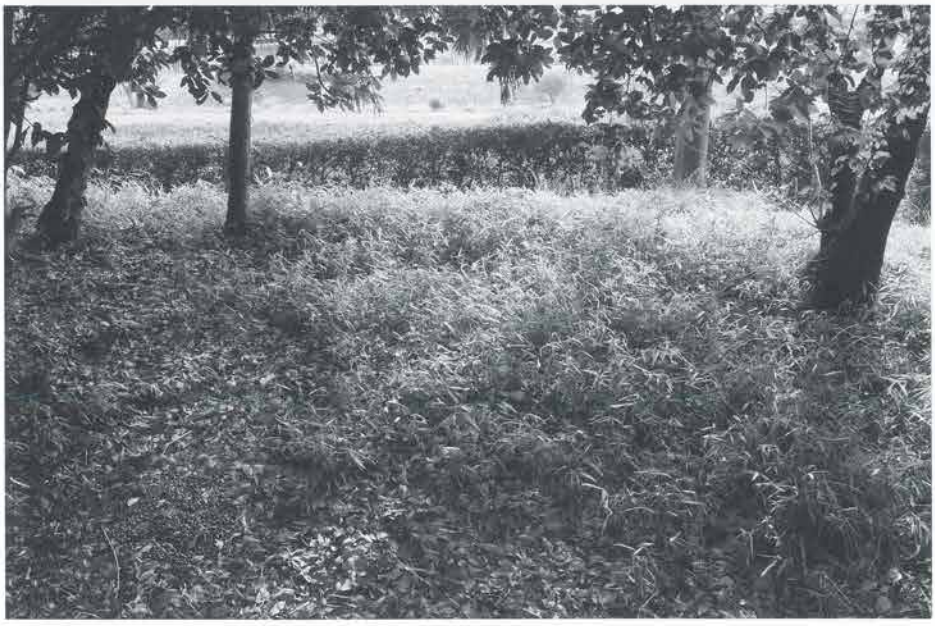
西安寺周辺航空写真（西から）

西安寺周辺航空写真（南から）

舟戸神社遠景（北から）



1トレンチ調査前
（西から）



1トレンチ調査前
（西から）

1トレンチ
腐葉土層除去状況
（南東から）

1トレンチ
炭層検出状況
（南から）

1トレンチ
炭層検出状況
（南東から）

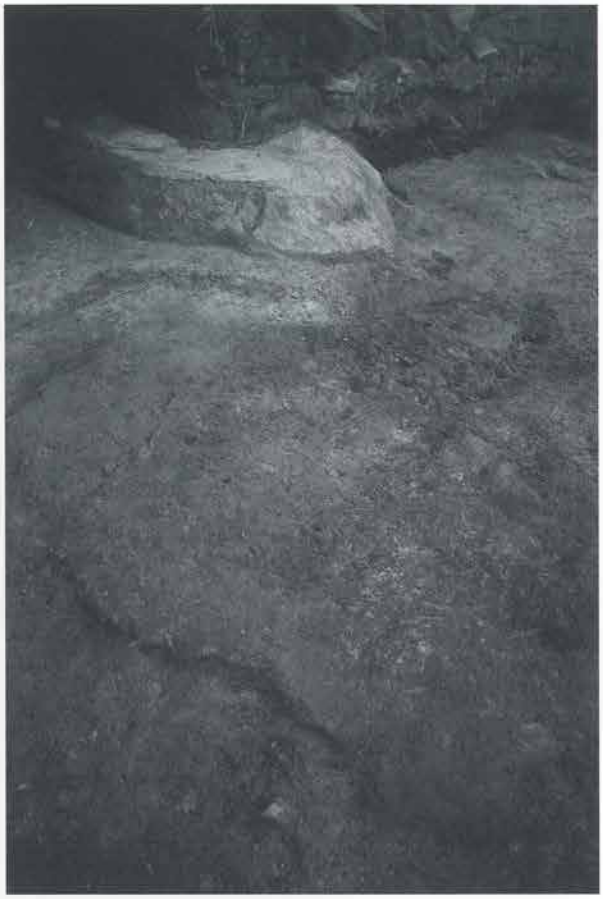
1トレンチ遺構検出状況（測量用合成写真）

1トレンチ
基壇検出状況
（南東から）

1トレンチ
基壇検出状況
（北東から）

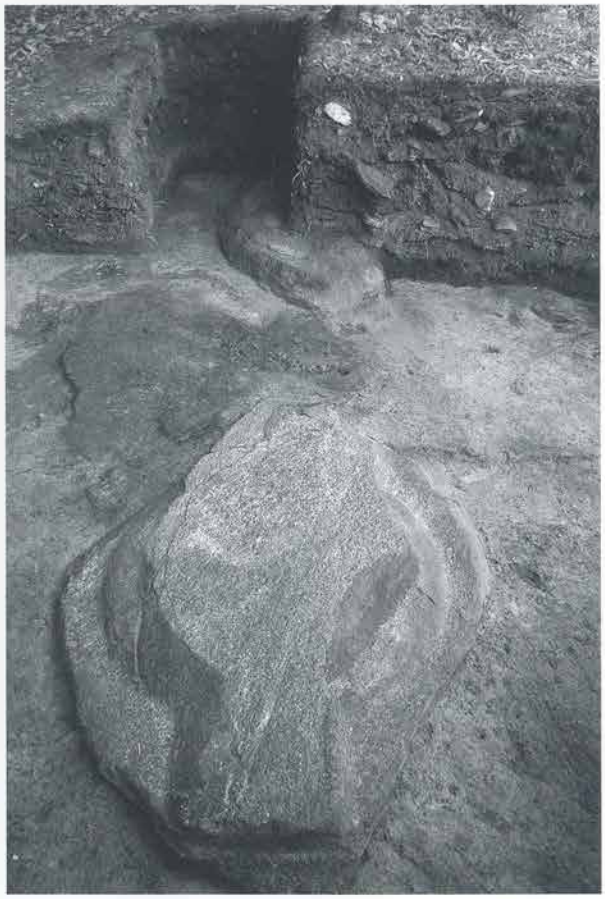
1トレンチ
礎石抜取穴検出状況
（北東から）

1トレンチ基壇検出状況（西から）



1トレンチ焼土検出状況（南西から）

1トレンチ基壇端検出状況（南から）



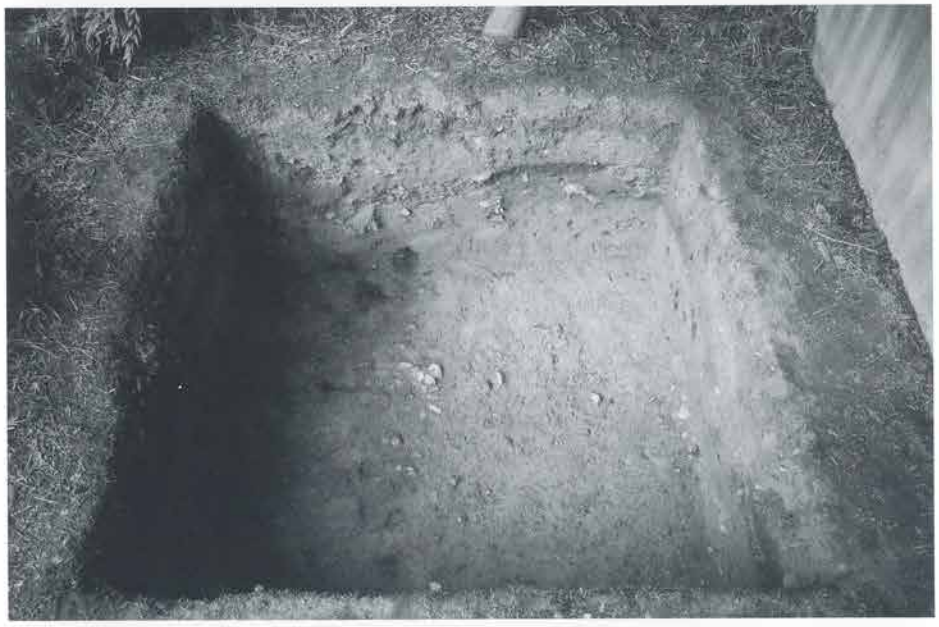
1トレンチ礎石検出状況（南から）

1トレンチ礎石1
（南西から）

1トレンチ礎石2
（西から）

1トレンチ土層断面
（南から）

2トレンチ調査前
（東から）



2トレンチ調査状況
（東から）

2トレンチ調査状況
（西から）

1

3

4

2

5

6

7

12

9

11

10

8

13

14

15

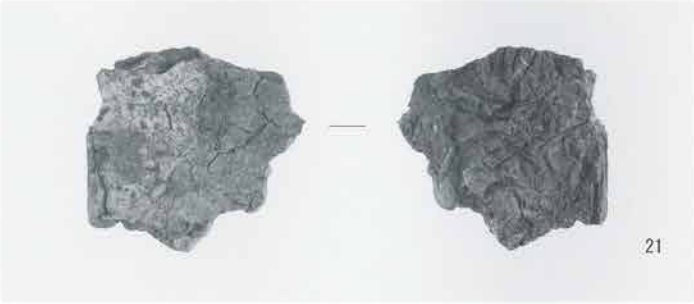
16

19

17

20

18


21

22

23

24

25

報告書抄録

ふりがな	さいあんじあとだい３じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	西安寺跡第３次発掘調査報告書
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	岡島永昌、櫻井恵
編集機関	王寺町教育委員会
所在地	〒636-0002　奈良県北葛城郡王寺町王寺２丁目１番18号
発行年月日	平成28（西暦2016）年３月25日

収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
西安寺跡	奈良県北葛城郡王寺町舟戸２丁目4189番	29425	10B1	34°35′35″	135°42′46″	2015.2.16.～03.12.	28.2㎡	範囲確認

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西安寺跡	寺院	古代	塔基壇 礎石 礎石抜取穴	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦	飛鳥時代末～奈良時代初めの塔跡を確認

西安寺跡第３次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書　第11集

2016年３月25日

編　集　　王寺町教育委員会
発　行　　奈良県北葛城郡王寺町王寺２丁目１番18号

印　刷　　株式会社 明新社
奈良市南京終町３丁目464番地